

コロナ禍 2年ぶり米作り

静岡文化芸術大生、住民と連携



田植えに取り組む学生＝浜松市北区引佐町の久留女木の棚田

静岡文化芸術大(浜松市中区)の学生が北区引佐町の久留女木の棚田で、2年ぶりに米作りを再開した。新型コロナウイルスの影響で課外活動が制限された昨年は栽培を中止。学生が作業できない間は地域住民が手入りに協力し、再スタートを切ることができた。

北区 久留女木の棚田で田植え

同大による棚田での米作りは授業やゼミの一環として5年前に始まり、耕作放棄地で作った米を商品化するビジネスモデルの確立を目指している。今年は学生有志が授業の担当教員から活動を引き継ぎ、ブランド米「こまる」を約300平方メートルで栽培する。1、2年生を中心に学生11人がこのほど、田植えを行った。

新型コロナウイルスによる学生の活動自粛期間中、棚田の草刈りに励んだ地元の仲井政雄さん(70)は「1年間手付かずでは田んぼは荒れ放題になる。学生が戻ってきてくれてうれしい」と喜ぶ。

今後は冬の販売に向けて、学生が週1回棚田を訪れて管理作業にあたる。1年時から米作りに関わっている文化政策学部3年の鈴木義人さん(20)は「下級生にノウハウを伝えて持続可能な活動にしていく」と話した。

(浜松総局・柿田史雄)